今後の予定：12/27 は休講。11. 神(1/17)、14. 死（1/24）

＜前回：リューサーとアーレント＞

０．現代の宗教哲学に必要なもの。

・批判的合理性　→　宗教批判

・歴史的思考方法　→　宗教の実定性・歴史性の理解

（１）思想的課題としての現代批判、神学と哲学

１．リューサー：フェミニズムあるいはエコ・フェミニズム

・伝統宗教における抑圧構造（二分法、階層性)。暴力、制度、言語、意識のすべての面で。
　　神が男性イメージ（家父長的で王権的）によってのみ語られている。

・争点としての聖書

２．リューサー「エコフェミニズム――神学への挑戦」

エコフェミニズムは女性への支配と自然への支配の相互連関を吟味し、それから解放を目指しているが、性差別と環境的搾取の間に見られるこの関係性には、文化―象徴的レベルと社会経済的レベルの二つのレベルが存在している。前者は後者を反映し承認するイデオロギー的な上部構造と考えられる。つまり、後者は、事物の自然本性あるいは神（神々）の意志との関連で正当化される。女性、奴隷、動物、土地への男性の支配関係は財産・所有として法的に指定され、この法は神（神々）よって与えられるという連関である。

↓

社会批判（政治と経済）の必要性

３．アーレント：全体主義批判と政治の復権

（２）抑圧の歴史的起源と克服の可能性――リューサー

４．リューサー：デイリの伝統的キリスト論の徹底的な否定論に対して､フェミニスト神学に至る思想系譜をキリスト教思想の伝統自体の中に再発見し、その過程でキリスト論の再構築を試みている。

５．古典的キリスト論（カルケドン公会議の)。イエスという歴史的人物が男性であったことと､神の子あるいはロゴスが男性であることとの間に必然的かつ存在論的な関係があるという考えが派生。女性原理が神象徴の中から排除される。

６．イエスの宗教運動から家父長的なキリスト論（正統キリスト論）の成立という 400 年以上のわたる歴史的なプロセス（キリスト論の家父長化）は、イエスの宗教運動からの変質であり、それは、他のキリスト論の諸様態の排除によって可能となった。

７．イエスの宗教運動に内包されたフェミニスト的キリスト論（女性の経験と相関しうるキリスト論)。リューサーのフェミニスト神学の基礎論の一つは聖書学的知見。

　フェミニスト神学の聖書解釈は、まずイエスの宗教運動の中に男性優位イデオロギーとは異質な主張を再発見し､続いて正統キリスト論によって抑圧されてはいるが様々な仕方で生き続けてきた他のキリスト論を掘り起こす作業を行う。

８．正典化のプロセス

多様な可能性の中より家父長的なキリスト論が正統キリスト論として公認され､それに伴って他のキリスト論の可能性は聖書テキストから排除され隠蔽される。

９．リューサーが注目するのは､神秘主義の伝統に見出される両性具有的キリスト論と、預言者的千年王国論的運動に見られる霊的キリスト論。

　キリスト教思想史研究者としてリューサー。

10.「支配－従属」のモデルに規定されないキリスト論（フェミニスト的キリスト論）の

再構築。

「解放者として語るイエスの能力は、男であることに存するのではなく、この支配の制度を批判し、彼自身の人格の中に、奉仕と互いの法的権限を認め合う新しい人間性を具現しようとした、その事実に存するのである。……神学的に言って、イエスが男であることは、究極的な重要さを持たないと言えるかもしれない。」

（３）政治的なものの起源とその変容――アーレント

４．アーレント、遺稿集『政治の約束』。古代ギリシャのポリスをモデルとして、次のような仕方で政治の理念を提示している。

５．古代ギリシャのポリス→政治的なもの（理念型として提出された「政治」）

公共性、言語・自由、政治

複数性・多元性、闘技・討議

政治：自由な共同性において、相互の説得のための言論を用いた合意形成の営みによって構築された「公共圏」（the common public world）。

７．アーレントの政治哲学：「公共圏」としての政治。

「経済」：生命維持のための労働の領域であり、公的なものとの対比で言えば「家庭の敷居」（the threshold of their houses）内の私的領域をその基盤としてなされる活動。

家庭内の私生活（親密圏）は、公的領域の活動から一時的に逃れるべき避難所という点では、政治的なものの存続の条件。

９．アーレントの議論は抽象的な公私二元論か？

10．問題は、全体主義の起源を論じる中でアーレント自身が注目する「社会」の成立である。近代の特性を「社会的なもの」の登場・拡張として捉えるところに――「近代＝社会化」――、アーレントの近代論の意義を認めることができる。

11．Hannah Arendt, *The Human Condition*, 2nd edition, The University of Chicago Press, 1958.（ハンナ・アレント『人間の条件』ちくま学芸文庫、1994 年。）

12.、「社会的なもの」の到来：古代的な私的と公的の境界線は、近代化のプロセスにおいて崩れ去り、近代的な社会は、経済的活動が公的領域の中心的な関心事となる。＝大衆社会（mass society）。これは、近代化＝社会化の当然の帰結と言える。

13．近代社会の両義性：平等性の実現／政治的な主体の個性あるいは複数性の喪失。

近代経済学の成立の歴史的前提なのである。経済人という人間理解。

人間を画一的な行動パターンに還元することによって、人間の経済行動を統計学的に処理し予測することが可能になる。このような大衆社会は全体主義の前提であり、この中で、個人は反社会的で異常であるとの評価を免れるためには、支配的な行動パターンに同化するようにとの圧力を受ける。

（４）政治的なものと宗教――アーレント

14.「行為 action とは、物あるいは事柄の介入なしに直接人と人との間で行なわれる唯一の活動力であり、複数性という人間の条件、すなわち地球上に生き世界に住むのが一人の人間 man ではなく、複数の人間 men であるという事実に対応している」（アーレント、1958、

15．言論における合意が限界。言論・行為の脆さの議論――不可逆性（irreversibility）と予言不可能性（unpredictability）。

16．脆さにもかかわらず、政治的なものが存続可能になるためには、赦しと約束が必要。「行為が始める過程の不可逆性と予言不可能性にたいする救済は……行為そのものの潜在能力の一つが救済に当たるのである。不可逆性というのは、人間が自分の行なっているこ

とを知らず、知ることもできなかったにもかかわらず、自分が行なってしまったことを元に戻すことができないということである。この不可逆性の苦境から脱けだす可能な救済は、赦しの能力である。これにたいし、未来の混沌とした不確かさ、つまり、不可予言性にたいする救済策は、約束し、約束を守る能力に含まれている」（同、371）、「約束の実行に拘束されることがなければ、私たちは、自分のアイデンティティを維持することができない。……この暗闇を追い散らすことができるのは、他人の存在によって公的領域を照らす光だけである。なぜなら、この他人は、約束する人とそれを実行する人とが同一人物であることを確証するからである。したがって、赦しと約束というこの二つの能力は、共に複数性に依存し、他人の存在と行為に依存している。」（同、372）

10.モルトマンとハーバーマス――多元的世界と宗教の意義

Ａ．ホストモダンの思想状況における「キリスト教思想と哲学」
Ｂ．啓蒙的近代を特徴付ける根深い反宗教性からの転換

（１）現代思想（1970 年代以降）の問題状況

１．啓蒙的近代・西欧的近代
・政教分離モデル：宗教を原因とした公共圏内の分裂・対立の解消
・公共圏からの宗教の排除（＝私的事柄としての宗教）
・世俗社会、宗教の世俗化論
「宗教と文化」の二分法的理解、自律と他律
・欧米的価値による一元的な公共圏の構想（グローバルスタンダード！）

２．「ポスト近代」という状況へ
・二つの世界大戦（欧米的価値の公共性は戦争を回避できなかった）と民族自決
・グローバル化の進展による多元性の進展
・啓蒙的な一元論から、多元性の適切な理解に立った公共論へ
齋藤純一『公共性』岩波書店、2000 年。

３．「宗教と文化」から「多元的な宗教文化」へ
土屋博『宗教文化論の地平――日本社会におけるキリスト教の可能性』北海道大学出版会、2013 年。
1
宗教・思想・伝統の多元性の現実と、それを前提とした公共性の確立
対話・コミュニケーションが問われる。

（２）モルトマン（1926-）

・1960 年代以降の現代神学を代表するドイツ・プロテスタント神学者（組織神学）。

４．モルトマンの見る 20 世紀
・『二十世紀神学の展望』
19 世紀と 20 世紀／世俗的適応性とキリスト教的アイデンティティー
／エキュメニカルな時代

実存論的神学（ブルトマン、歴史の問題）／超越論的神学（ラーナー、人間中心的世界観の問題）／文化神学（ティリッヒ、世俗的世界の宗教的解釈）／政治神学と未完の近代

希望の神学

C.『二十世紀神学の展望』（新教出版社、1989 年）

「Ⅰ　二十世紀における神学の道」（1984/1988）、「Ⅱ　今日の神学の調停」（1986/1988）、「Ⅲ　戦後ドイツの神学」（1984）、「Ⅳ　希望の神学」（1985）

「二十世紀における教会とキリスト者とは、歴史上ほとんどどの世紀にもかつてないほどに、異論と反対と迫害に出会わざるを得なかった。・・・キリスト教信仰のこの近代の経験は、もうひとつの別の「調停の神学」を、つまりキリスト教の使信を単に適応によってのみならず対峙することによっても調停し、対応ばかりか必然的な対立をも呼び求めている。政治神学は、この種の一連の調停の神学全体の出発点となった。すなわち、革命の神学、解放の神学、黒人神学、フェミニスト神学、そしてその他のアジア・アフリカにおける地域的に規定された「文脈的」神学である。これらの神学的基礎の一つは、終末論的救済を歴史的解放でもって調停する「希望の神学」の内に見出せる。」（118-119）

「カント」「「わたしは何を望んだらいいか」」「それまで宗教は常に永遠なるものに向けられ、伝統に基づいてきた。だが、近代の開始以来、未来が人間精神の中心になった。宗教的問いは希望の問いに、人格的、社会的、普遍的希望の問いとなる」、「未来に開かれた世界史」、「恐れと希望の中で人間はこの未来を精神的に先取りする。」（119）

「新しい政治神学」（212）

「政治神学は、ヨーロッパの枠を広く越える、神学「運動」となった」、「革命の神学」「解放の神学」「民衆の神学」、「この神学が愛によって働く信仰（fides es caritate formata）のうちに端緒を持っていること」（213）

「もし、「わたしの神学の構想」を箇条書きにまとめなければならないとすれば、恐らく、最小限次のように言うに違いない。わたしは、

――聖書に基づいた、

――終末論的に方向づけられた、

――政治的な責任を負う、

神学を考えようとしている、と。」（221）

・『神学的思考の諸経験』

神学の場（本人自身のために、教会において、教会のために、大学において）

神学者の誰（すべての信仰者たちの共通の神学、無神論者たちの神学、宗教相互対話における神学）

歴史神学／キリスト教神学／自然神学

希望の解釈学

解放の神学の鏡像（黒人神学、ラタン・アメリカの解放の神学、民衆の神学、フェミニズム神学）

５．多元性における公共性とキリスト教神学

・『自伝』より

「公共的神学」（第三部第二章）：エキュメニカル運動への関与、医学者のための神学

「希望の神学」「政治的神学」：キリスト教とマルクス主義との対話
「キリスト教とユダヤ教の対話」：ピンヒャス・ラピデ
「女性また男性としての神について語る」
1
多元的世界における対話・討論の神学
公共圏（正義と希望）、エキュメニズム（教派的宗教的多元性）、フェミニズムと環境、欧米的世界を超えて（アジア、アフリカへ）

１．ユルゲン・モルトマン『わが足を広きところに――モルトマン自伝』新教出版社。
第一部　青少年時代
　第一章　入　植
　第二章　一九四三年七月のゴモラ作戦
　第三章　戦争捕虜（一九四五―一九四八年）
第二部　見習い期間
　第一章　ゲッティンゲンにおける神学生（一九四八―一九五二年）
　第二章　ヴァサーホルストの牧師（一九五三―一九五八年）
第三部　初　め
　第一章　教会立ヴッパータール神学大学で（一九五八―一九六四年）
　第二章　公共的神学からボンへ
第四部　希望の神学
　第一章　希望の神学（一九六四年）
　第二章　キリスト教とマルクス主義の対話の中で
　第三章　私のアメリカへの夢
第五部　政治的神学
　第一章　テュービンゲンにおける第一の始まり（一九六七年）
　第二章　テュービンゲンにおける第二の始まり（一九六八年）
　第三章　全世界への講演旅行（一九六九―一九七五年）
　第四章　バンコクでの世界宣教会議（一九七二―七三年）
　第五章　極東への道（一九七三―一九七五年）
第六部　新しい三位一体的思考の十字架のしるしにおいて
　第一章　十字架につけられた神（一九七二年）
　第二章　神学的地平の拡大
　第三章　エキュメニカルな地平の拡大
　第四章　場所と地位
　第五章　キリスト教とユダヤ教の対話
第七部　未完成の完成――生の挑戦
　第一章　新しい三位一体的思考
　第二章　ギフォード・レクチャー（一九八五年）エディンバラにて――創造における神
　第三章　中国への私たちの長い行進（一九八五年）
　第四章　女性また男性として神について語る　エリーザベトとの共同の神学
　第五章　生への新しい愛
第八部　終わりの中に始まりが

第一章　終わりと始まりの祝い
第二章　新しい重要点
２．森田雄三郎「現代神学の動向」（1987 年）
「第三の新しい動向を代表するのは、Ｊ・モルトマンであり、彼を一躍注目させるに至ったのは、『希望の神学』（一九六四年）であったことは、あまりにも有名である。モルトマン神学はやがて「革新の神学（革命の神学）」の展開をうながし、その後のＷＣＣの神学的基本線を提供する。かつてバルト神学に賛同した人々のうち多くの者は、この流れに参加して行った。このようなバルト派の動向に関するかぎりでは、若きバルトが社会主義者から「神の言」の神学者へと超越して行ったのと、逆方向に向かっているとも言えよう」(41)。
「モルトマンの最初の三部作『希望の神学』、『十字架につけられた神』（一九七二年）、『霊の力における教会』（一九七五年）を読むとき、われわれはブロッホのみならず（たとい多くの言及がなされずとも）アドルノ、ハバーマスといったフランクフルト学派のいわゆる「批判的理論」の社会哲学の主張がいたるところで考慮されていることに気づくことであろう。しかし、この三部作は、その後に出版された『三一神と神の国』（一九八〇年）によれば、なおプログラム提出にすぎず、本格的な方法論に基づいた神学的反省は『三一神と神の国』にはじまることを、モルトマン自身が表明している。この書以後の彼の著作を見るとき、直ちに気づく新しい特色は、彼がエコロジーの神学を唱える米国のプロセス神学にかなりの接近を示している点である。したがって、ごく最近のモルトマンの神学的動向が、エコロジー的関心と、終末論的な社会行動理論とを、どのように総合するかが、彼を理解する上での一つの重要な焦点をなすとも言えよう。」（41-42）
「創造と進化――創造における無」（1990 年）

６．「組織神学論叢」（1980-）
対話の成果
・三位一体論における東方神学（社会的三位一体論）
・創造論におけるユダヤ教神秘主義（カバラ）
　　弱い神
・エコ・フェミニスト神学（身体・空間・環境）
　　時間論の再考

（３）ハーバーマス（1929-）
・フランクフルト学派第二世代。啓蒙的近代あるいはカント主義の伝統。公共論・コミュニケーション論の先駆者。

７．近代主義からポスト近代論へ
・西欧思想と形而上学
　伝統的形而上学　→　カント的な超越論主義　→　ポスト形而上学
　　欧米的価値による一元的な公共圏の構想
　　から、多声的な理性の統一あるいはコミュニケーション理性
　芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」（京都大学基督教学会 『基督教学研究』第 24 号、2004 年、pp.1-23）。

８．啓蒙主義的な世俗化論（伝統宗教への無理解）からポスト世俗化時代へ
　1960 年代の世俗化論の予想を覆して、世界は宗教回帰を示している。
ウルリッヒ・ベック『〈私〉だけの神――平和と暴力のはざまにある宗教』岩波書店、2011 年。

９．ポスト世俗化時代の認識以前のハーバーマス
　公共圏の議論において宗教についてほとんど語らない。近代を世俗的な表現で理解するという態度。
「政治的リベラリズム（私はこの政治的リベラリズムの特定の形態であるカント的な共和主義を擁護しようとしているのだが）の骨子は、民主的立憲国家の規範的基盤を非宗教的かつポスト形而上学的に正当化しようとするところにある」（2007、4）

10．21 世紀のハーバーマス
・政治的リベラリズムの正当化には非宗教的な仕方で十分。しかし、「モティベーションという点ではたしかに疑念が残る」（2007、8）
「国家公民は、自分たちのコミュニケーション権利および参加権をアクティブに行使しなければならない」が、これは「相当に高度のモティベーションの投入を要求される」「シヴィル・ソサイエティは」「「政治以前の」生き生きとした源泉からそのエネルギーを得ている」（2007、9）。
cf. カントにおける最高善の要請（徳と福の一致）
・「国家公民の私生活中心主義」「市民たちの脱政治化」に対して「統合的紐帯」「憲法愛国心」が必要。
・「哲学は、宗教的伝統に対して、学ぶ姿勢を持ち続けねばならない」（2007、17）
「二重で相互補完的な学習過程としての世俗化」「世俗知の側も、宗教的な確信には認識としてのステータスがあり、それはまったく非合理的であるなどとは言えないことを認めねばならない」（2007、22）
・「信仰を持った市民たちが公共の問題に対して彼らの宗教的な言語で議論を提供する権利を否定してはならない」（2007、24）
しかし、「誰にでもわかる言葉づかい」（2014a、28）という条件。
・「リベラルな文化は、宗教的な言語でなされた重要な議論を公共の誰でも分かる言語に翻訳する努力に世俗化された市民たちが参加することを、期待していいのである。」（2007、24）
↓
「翻訳という問題」：宗教言語を公共言語へ
問題：公共言語とは？　いわゆる「公共言語」は真に「公共的」か？
　多元的世界（ポスト形而上学的時代）において、そのような言語は単一の形で存在するのか？
　翻訳は一方向的か？
　「重なり合う合意の構想」（後期ロールズ）
　「多元主義型市民社会の熟議政治」（ハーバーマス）
　「家族的類似性」（ウィトゲンシュタイン）

（4）「キリスト教思想と哲学」という問題について

11.「有神論　対　無神論」、「キリスト教　対　マルクス主義」といった図式はもはや古くなりつつある。「宗教　対　科学」、「キリスト教　対　仏教」は？

12. 古くて新しい問い、未完結の問い

問題状況の変遷に留意する必要がある（思想史）。

対話・コミュニケーションにおける「多元性と合意」（多元的公共性）の理論的な掘り下げは、哲学的な思索を必要とする。

↓

さまざまな学問領域における問題意識を共有すること。

そのための場所（モルトマン「広い場所」）を見出すこと。

＜参考文献＞

（1） モルトマン

・1960 年代 :『希望の神学』『十字架につけられた神』『聖霊の力における教会』（新教出版社）

・1980 年代～ :『三位一体と神の国』『創造における神』『イエス・キリストの道』『いのちの御霊』『神の到来』『神学的思考の諸経験』（新教出版社）

・『二十世紀神学の展望』

・『わが足を広きところに――モルトマン自伝』

（2）ハーバーマス

・ユルゲン・ハーバーマス『ポスト形而上学時代の思想』未来社、1990 年。

・ユルゲン・ハーバーマス、ヨーゼフ・ラッツィンガー『ポスト世俗化時代の哲学と宗教』岩波書店、2007 年。

「民主主義的法治国家における政治以前の基盤」

・ユルゲン・ハーバーマス、チャールズ・テイラー、ジュディス・バトラー、コーネル・ウェスト『公共圏に挑戦する宗教――ポスト世俗化時代における共棲のために』岩波書店、2014 年。

「「政治的なもの」――政治神学のあいまいな遺産の合理的意味」

・ユルゲン・ハーバーマス『自然主義と宗教の間　哲学論集』法政大学出版局、2014 年。